
荒れ屋敷の今日も騒がしい住人達

ダイダラボッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荒れ屋敷の今日も騒がしい住人達

【Nコード】

N5462R

【作者名】

ダイダラボッチ

【あらすじ】

世界の常識が非常識に蹂躪されて早十年。

最早、常識が非常識に乗っ取られ何もかもが不確かでありながらも、ヒトビトは懸命に生活していた。

異界からの来訪者達との衝突もようやつと下火になり始めた昨今。それはささやかに、ひっそりと始まっていた。

不安定な世界は奇跡的にも続き、されどそれはいつまでも続くものではなく。

全ての元凶『世界の敵』と言われた『黄昏の君』が再び姿を現す。
これは、終焉の鐘が鳴り響く前に全てを救う為の物語。

十年の重み

あなたは何かの結果に『ああであつたら』『こうしていれば』と悩んだ事は無いだろうか？

まあ『たれば』ってやつだ。

僕、神崎時雨は正直言つてよくある。

例えば、個人的に恥ずかしい記憶は消したいし、致命的な失敗をしてしまった時は無かったことにしたい。どれもこれも日々送るのに支障を来たすとまではいかずとも、正直言つて忌々しいものだ。覚えておきたい様な思い出は美化された記憶の中にしか無いのか、それを忘れたくないと願つたところであつという間に記憶が風化する。

寧ろ、汚点にしかない様なものばかりが脳味噌のただでさえ狭い部分にこれでもかと詰まつているのが問題である。

恥の無い人生を送れる人間なんて居やしないが。

恥の多い人生を送る人間だつて嫌じゃないか。

「もう十年、か」

布団に包まりながら、ポツリと呟いた。

おおよそ紀元前から現代まで、人類が必死になつて構築し積み重ねてきた『現実』の全てが水泡に帰し、沢山の人々が夢想と空想にして諦めた『幻想』が顔を覗かせ出した。

切欠となつたのは『終りと始まりの日』バースデー『記念日』バースデーあるいは『あの日』から。

その代償は全人類三分の二の命。

原因はたった一人の我侭であるとまことしやかに囁かれる。

そしてそれはあながち間違いではない。

何故ならあの夕暮れに染まった丘で僕は目撃してしまったからだ。目の端に涙を浮かべながら怒りに震えた拳を握り締め、黄昏色の洪水を背に立ち尽くしていた、あの姿を。

事件の日より十年。まだ十年である。

当時で言う、それこそ御伽噺に出てくるような容姿が跋扈するようになり。

非論理的で荒唐無稽な、それこそ幻想としか言いよつの無い者達に圧倒された。

ロジックの塊はマジックの理であっけなく崩壊し、容赦なく粉碎され、砕けた先から全く新しいモノへと変化した。

妖精のような人が居た。妖怪のような人が居た。

格別のような人が居た。特別なような人が居た。

複雑怪奇な人が居た。単純明快な人が居た。

現在、無数の異世界が一つの世界を構成し、世界は多種多様なヒトビトが埋め尽くしている。

悪魔や獣人に加え妖精、超能力者に化物、果ては神も居れば普通人も居るといふ。

当時の治安はすこぶる悪かった。統治機関が結成されたが当然それに反発する者達との争いが起こり、漸く落ち着いたのが三年程前の話、自分自身よく生きていたものだと感じた。

そう、まだ生きている。

（起きよう……）

むっくりと上半身だけを起こし、首を回して腰を捻り。指を組み

一つ伸びをする。

なんとなく、室内を見回してしまう。

テレビに箆筥、壁際には中身の殆ど入っていない本棚と、冬には炬燵になる卓袱台が立てかけてある。それがこの部屋にある全てだった。

朽ちかけていた民宿を改装した木造二階建ての一室。八畳一間でお家賃月々三万円、破格だ。トイレ、台所、風呂、全て共用。

身支度を整えて部屋を出ると、直ぐに談話室が見える。

吹き抜けになっている為、朝はふんだんに天井のはめ込みガラスから日光が入り、夜はそのまま絶妙な月見ができる。

日の光に包まれた中で食事が出来るよう、備え付けのテーブルとソファが対面する形に配置され、角に置かれた肘かけがついた革張りの小奇麗な椅子に、同じ屋敷の住人が朝食を取っていた。

年は三十後半、キビツとしたスーツに明らかに普通の動物ではない物を使った毛帽子。

足元に置かれたトランクの角には、拭いきれなかったのか赤黒いシミが点々と付着している。

何の用途に使われたのだろう。

おはようございますと、声をかける。

「おや、時雨さん。おはよう、挨拶を欠かさないのは良い事だね。」
どこの誰とは言わないが、挨拶もまともにしない山猿とは大違いだ、と続ける。

穏やかな眼差しでありながら何処か凄みがある彼は、統治機関が開いている学園で教鞭をとっている。話の長い、それでいてくどいのが最大の特徴。

通称『教授』生徒からの人気は高いらしい。

「つまりは親しき仲にも礼儀ありですね」

「其の通り」

きりのいいところでさっさと切り上げないと話が進まないのが欠点。

「おはようございます、しぐれさん。朝ごはんどうしますか？」

戸口の端にちらちらと銀色の毛が見え隠れしている。この屋敷の大家である狼人の尻尾だ。

「何時も通りで」

はい。と元気よく台所から返事が聞こえてくると同時、ジュー
ジューと何かを焼く音。

人間年齢換算で十三歳程度という若さで各自の部屋掃除以外の家事、殆ど全てをやっている。獣人の自立は早いと聞くが、両親この仕事を与えて他の土地へと移ったから驚いた。

「何時も悪いね、ノラちゃん」

「それは言わない約束ですよって」

ノラは愛称で本名ではない、本名が長いので誰も呼ばない、少々不憫な気もする。

そんな様子を教授は暖かい眼差しで眺めて言った。

「そろそろ一年か……あの子の様な振る舞いはよっぽど特殊な家ではない限り、同年代の人間には先ず出来ないだろう。情けないのか仕方が無いのか、それが問題だ」

食後のデザートか、苺を口に運びコーヒーを啜る教授。片手には今日の朝刊だ。

「現代の人間社会を憂いておられるのですか？」

「先代の人間社会も憂いておるよ。今こそ変革の時と成れば……とね。いやはや、無駄に年は食いたく無いものだ」

僕の眼にはまだ十分若いと思うのだが。

「しかし若さ故に、悪しき存在に誑かせられなければいいのだがね。彼らも……」

バサツと読んでいた新聞をこちらへ放る。

「何かしらの思想故に決心し、行動したのだろう。それは構わん。問題は」

見出しには『白昼の悪夢』『激化する学生運動』『死傷者数百名か』と何やら不穏な単語が並ぶ。

「彼らが本当に自分の意志で決意し、行動したかだ」

「はあ……」

そう言われてもピンとこない。

僕はこんな反対運動には欠片も関わっていない善良な一般市民だ。一応眼を通してみる。教授は自分で考えようとしないう奴には聞いても答えてくれない。

デモ行進だったのが何でそんな暴力沙汰になったんだか。いや、そもそも……

「そう言えば、何でこんな事になっているんでしょうかね？」

かくん、と落胆したように肩を落とす教授。

「そうか、場所は遠く君には馴染みが薄い話題だからな」

「あ、ぼくも聞いてみたいです。それ」

丁度出来上がったのか、エプロンを付けた二足歩行する小犬がやって来た。子犬とは言ったが外見における最大の特徴、耳と尻尾を除外したら人と余り変わらない。

耳は折れた形の、俗に言う『垂れ耳』である。

食パンとスクランブルエッグがテーブルに置かれ。教授は『宜しい、ならば説明しよう』と熱弁を振る。

何故か二人揃って教授に社会情勢を習うことになった。

「先ず、この常識の無い混沌とした世界で、一定の秩序を得ようとした結果。魔族を中心とする統治機関が発足した。ここまではいいかい？」

「大丈夫です」

ノラちゃん、よく出来た生徒のよう。

「だが、この統治機関は少なくとも暴力を振るってこの世界を纏めようとした」

「でもそれは解決したはずですよね？」

「三年前の暴動が切欠で統治改善、よかったねって話じゃないんですか？」

僕、出来の悪い生徒のよう。

「そこが問題なんだ。旧世界における人間の掲げた民主主義は魔族の彼らからしてみれば、余りに馬鹿げていたのだろう。過去の記録媒体からも余り良い点を見つけられなかったようだ」

「へえ、何が悪いんですか」

と、口を開いたところで頭上から声がかかった。

「明らかに劣った存在。悪意ある者の醜悪な振る舞い。虚栄に満ち溢れた虚構の目標、ゲスで民主主義の皮を被って自分達こそが国を動かすのだと勘違いした選民的思想。簡単に言えばこうだ、何か間違っているか？」

二階の手摺に寄りかかってこちらを見下ろす悪意に濁った眼、全身から漂う陰鬱な空気。髪はばさばさでカラスの巣の様。

折角、黒地に金糸銀糸で彩られた豪華な着物を纏っているというのに、織った人に申し訳が立たない位だ。それだけに留まらず左足には本物の足はそこには無く、指先まで精巧に出来た黒い義足がついている。馬子にも衣装、ふとそんな言葉が浮かんだ。

彼の名を叢雲空鳥むらくもからとり、二階の四号室に住まう住人である。

とんとんと階段を下りてくると、彼はやおら口を開いた。

「水の腐ったプールに、綺麗な水を注いだところで汚れは落ちないだからさ……　クソ忌々しい」

「からとりさん、朝食はどうしますか？」

「パンだけだ、自分でやる」

ノラちゃんからの質問に応じながら台所へ、トースターにパンを放り込みコーヒーを持って来ると席に着いた。

「珍しいね、君がこの時間に起きてくるとは」

「……猿の所為だ」

いらいらした口調で応じる空鳥氏。

「猿って、麻白さんのことですか？　確かに猿っぽいしマシラだと猿の意味ですけど」

「黙れ、貴様に解るか？　徹夜で人生ゲームに付き合わされたんだぞ、二人つきりでやるパーティーゲームの何が楽しい」

貴様とか言われた。

「ボードのアレですか？」

「違う、ゲームソフトだ。あれなら桃鉄の方がまだマシだ」

なら付き合わなきゃいいのに。あと大差ない気がする。

丁度、教授から右横、僕から右前の位置、ノラちゃんの正面が彼の指定席みたいな場所である。

おもむろに机の新聞紙へと目を移して手に持ったコーヒーを一啜り。

「んで、今日は朝から物騒な話題が流れているみたいだな。機関がなんだって？」

「ああ、その話なのだが。さて、どう説明したものか」

一人悩む教授。人間たちと魔族達との価値観は酷く差がある。

同じ人間でも価値観の違いで戦争だつて起こるのだ、種族が違えばなおさらである。

やたら寿命が長く、下手なことじゃ滅多に死なない魔族たちの頂点を治めるのだ、才能に秀でているに決まっている、若しくは間違ったことなどしないというある種の信用が出来上がっているのだ。

それでいて部下となる存在も上司の問題点を指摘し改善させることに抵抗も、それによる地位の低下も無いという、社会形態としては素晴らしいと教授は褒めた。

「独裁政治、全体主義とも似ているな。問題は少々大雑把なところと融通が利かないところか。いや、政府や役所が融通を効かせ始めたらそれはそれで問題だ」

「まあ、独裁政治と言うだけで大抵の人は眉間にシワを寄せますしね」

「だからといって、人間主体の民主主義であればそれこそ独善的な政治家が現れる。責任を取ると言い張って無責任にも投げ出したりだ」

「無数の世界が交わり、無数のヒトが溢れ、無数の価値観が交叉するこの世界で、ヒトとしての権利を求める声上がるのは解る。魔

族達はその中に悪意を持った存在が紛れ込む可能性をどうしたら処理できるかが問題なんだろう？」

「そう、そして手っ取り早く間違いを排除したいなら人間を入れなければいい。それが間違えているとは思って居ない」

ふうう、と溜め息をつく教授。

「昔の人間だけじゃない、今の世界だからこそ。未知の可能性があるというのに……いやはや、話が長くなってしまった。そろそろ行かねば」

言うが早いかトランクを手に立ち上がる。

「休日なのに、お疲れ様です」

「ふふつ。これもまた、社会人の務めさ」

時計はもう直ぐ八時半、いつてらっしゃいと三人で見送りの言葉をかける。

「社会つてむづかしいですね」

「社会が難しいのか、それとも社会を構成するから難しいのか。現状が嫌なら何かしたらいいんだ、嫌なら死ねばいいんだ」

極論過ぎやしませんかそれは……

環境を変えようとしないのであれば死ねという、今が嫌なら死ねという事だ。

全てを投げ出して、全てに縛られることなく生きようとして、全てを放り出そうとして失敗した。

自分はそんな敗残者なのだと、世界に属していても社会には属せない、即ち社会不適合者なのだと彼は言う。

「なあ、オマエはどうなんだ？　今の世界に、適合できたのか？」

僕には何処で誰がどんな事をしようとして、僕自身が関わっていない限りは無関係である、結局は全て彼岸の出来事でどうでもいいと思っていた。

それこそ僕は、対岸で打ち上げ花火でも見ているかのように完全に他人事だった。

その時がやって来る迄はまだ……

だから僕は。

「どうでしょう？」

と、惚けた声で答えた。

休みの過ごし方は

休みの過ごし方は人それぞれだ、僕は太抵屋敷の裏手にある川で釣りをする。

朝食を済ませたら特にやることも無かった空鳥氏とノラちゃんを誘い、三人揃って釣り糸を垂れる事にした。

空は蒼く高く、雲の流れる速度はゆったりと。

実に長閑でまったりとした空気が漂う、なんと素晴らしい時間だろうか。

一般社会は休日であれ働いている人間は数多く居る。

休日出勤ご苦労様な教授はともかく、自営業を営む商店街の皆様方が休まれては流通が滞る。

こうして休日を満喫していると学生相手に孤軍奮闘している教授に若干の申し訳なさを感じてしまう。僕も学生のころは、それほど真面目な生徒ではなかった。

それでも平日だろうと休日だろうと、二十四時間営業中が相応しいラジオが放送を停止するようなことがあるとしたなら、それはきっと物理的な問題だということだろう。

「あれ？」

「む、止まったな」

水面の浮きをじーっと見つめ、さっきまで耳に流れてきていた軽快な音楽番組を放送していたラジオが、唐突に途切れた。電池切れかと首を捻っていると、隣に居るノラちゃんが先日取り替えたばかりだと答える。

となると自然、原因は……

「電波障害か、そういえばそろそろだったな」

「ですねえ。そういえば、そろそろでした」

「わふう…… また地震が起こるですか？」

「大丈夫、この前みたいに異界の溝からゾンビが家中に溢れ出す

なんて、そうそう無いよ」

「あつてたまるか」

「ノラちゃんには激臭だったでしょ？ 大変そうだったもんね」

「そうですけど、そうでなくですね」

複数の世界が交じり合った今の世の中は、ほんの『ちよつとした切欠』で異世界のものが溢れ出す。

勿論、繋がりやすい場所とそうでない場所があるが、不運なことに屋敷の中庭にある池は異界と繋がりやすく。前回、嗅覚が麻痺するくらいの激臭が屋敷内に円満した。

そんな傍迷惑な『漂着物』も有れば、世にも珍しい建造物だった、危険生物だったりと実に多様である。

興味深いことに、溢れ出すそれらは土地土地によって変わるのだ。無数の観測結果より思想や宗教、信仰など。即ち、暮らす人々の『価値観』に左右されるものではないかという、仮説が立てられたが仮説の域を出ない。

この国に漂着する物質は多すぎた。

『和』と改められたその名が示すかの如く、諸国で観測されたパターンのほぼ全てが漂着してくる。

そんな『漂着物』を機関が積極的に回収、換金してくれる為、新しい商売として成り立ち、住所登録とライセンス発行さえ済ませれば、その日その時から目出度く『ハンター』の仲間入りである。

但し、調査および探索の結果どのようなことがあるかと機関は保障しない。例えそれが死であろうとだ。

「また地震がおこるんですね……」

「でかいのが来る前に屋敷を点検しておいた方がいいかもな」

「瓦が全部割れるなんて奇妙な事、うちの屋敷くらいですよ」
前々回、実際に起こった。

この国における主な切欠は地震である。

元より地震大国、異世界と繋がって地盤が緩んでいるのか、月に数回地震が起こったり起こらなかったり。

その所為か場が不安定なのか、月に一度のペースで異界から漂着物が流れ出てくる。

正確には『漂着物が流れ着くのは』地震の影響で空間と異世界の擦れる『空天震』が起こった時だ。

その言葉の意味に専門家以外はそんなに大した差異は無いだろう、というのが教授のお言葉。

『漂着物』が流れ着いたときに生まれる余波の所為で、都心であれかつてのコンクリートジャングルの面影なんて欠片も残していない。

舗装されている場所もあれば地面が剥き出しの場所もあり、それでも荒廃した様な空気が流れないのは、きっと人々の活気で溢れているからなのだろう。

「向こうの人達は気付いてるんでしょうかねえ？」

「少なくともラジオを聴きながら見る奴は居ないと思うぞ」

今日の活気の前、それは対岸に見える河川敷で絶賛開催中である己の腕っ節を競う『ザ・リアルファイト』又の名を天下一無道大会。

簡単に言えば賭け試合である。ルールは実に簡単明瞭で一つだけ。『人を殺してはならない』ただそれだけだ。

つまり、超能力だろうとスタドだろうと気だろうと相手を殺さなければ良し。

血の滾るような熱い戦いが目の前で見れると言われても、そんなものに微塵も興味が無い僕と人ごみが苦手なノラちゃんは無関心だった。

ただ騒々しいなと思う程度であり、それが近くであるからといって足を運ぶような野次馬根性丸出しの人間でもないし。賭けは胴元がどうあっても儲かるシステムだし。

だが、空鳥氏は違った。違いすぎた。

流石、一部では『生ける伝説』『超人』と称されるだけであつた。十時の開会式直後、前回大会優勝者とのエキシビジョンマッチが

あつたのだが、その出場権を何処からとも無く入手しあつさり勝利、掛け金を搔つ攫ってきたのだ。

帰って来た直後の発言は「つまんねえ」ただ一言。

逆にそんな人物にとつて愉快なこととはどんな事なのか聞きたいが、恐ろしい回答が返つてきそうで未だ聞けず。そんな人が、横で退屈そうに寝そべつて「釣れねえな」とか言っている訳だが、全然そんな風には見えない。

余談だが空鳥氏の釣りの腕前はあんまり良くない。

僕らが使っている釣竿は魚以外の物も釣り上げるハンター御用達の特製品、少しの力じゃ壊れないし糸も切れない。水辺は比較的異界と繋がりやすい事を利用した合理的な道具である。

それを専門としている人を『フィッシャー』と呼ぶ。

開始から三時間経過の現在、各人の成果は次のとおり。

僕：小魚三匹、律動を繰り返す妙な色をした石一つ、魔導結晶一つ。

ノラ：奇怪な魚一匹、不思議な模様が彫られた空き瓶が一つ。
と、まあまあ成果なのだが。

空鳥氏の成果：長靴

見事に赤黄青の三色が右足だけ。それらが無造作に川縁にぽつぽり出されている。

「……」

「……」

僕とノラちゃん、必死に見ないように視線を釣り糸の先に集中している。

「……どうした、笑えよ？」

空鳥氏の、それが引き金だった。

「ぐっ……っ！！」

「……ぷっ！！」

無理だ、耐えようとした、堪えようとしたが流石に無理だ。

視界の隅で見えた、大真面目な顔で言い放ったのだ、滑稽にも程

がある状態で。

どうした？ 笑えよ？

「ぶっはっはっはっは」

「ぷははっははは」

「笑え、俺を笑うがいい！！」

空鳥氏、ヤケクソ。

彼にとっては不愉快だろうが、此方にとっては非常に愉快、教授にも見せてあげられないのが申し訳ないくらい愉快。

もう笑いすぎて手に力が入らない。

彼に運が味方をしたのか、そこで新たに空鳥氏の釣竿に当たりが来た。

「ハッ、笑うがいい貴様ら。ここで一気に大物を釣り上げて

」

黒い長靴だった。

「ブッ」

「はははっははは」

バンバンと地面を叩きながらかすれ声を上げるノラちゃん、腹筋が腹筋がああと微かに聞こえてくる。

空鳥氏に味方をしたのは笑いの神だったのか、すぐさま針を外して満身の力を込めて土手の向こう側へぶん投げた。

水を撒き散らしながら放物線を描きすっ飛んでいく、長靴が視界より失せて一拍の後、ベコンツという音が聞こえてきた。

もうその音すら愉快でしょうがない、箸が転がっても可笑しいよ

うな、あれと同じ状況だ。

「ああ、楽しくてしょうがないですね」

「俺は不愉快だ」

でしょうとも。

「何だその顔は」

ものすごい勢いで二人揃って顔をあらぬ方向へと向ける。

と、逸らした視線の先。長靴が飛んでいった方向より、こちらに向かつて土手を降りてくる三人の人影があった。そのうち一人は先ほど飛んでいった筈の黒い長靴を握り締めている。

『兄貴、アイツじゃないっすか』

『ああ、絶対そうだな』

と、話し声が聞こえてくる。どうやら先頭の男がリーダー格のようだ。

そのままその男は空鳥氏に詰め寄っていく。年は十七、八位だろうか。きっちり整えられたリーゼントに、赤いバンダナを額に巻いている。

時代錯誤だなと、思わず口に出してしまいそうになった。なんて解りやすいヤンキー。

右後ろに灰色のスボンからトカゲの尻尾を生やした亜人種リザードマン、菓子袋を片手に持った豚頭の亜人種ボーグがついていく。普通の人間より力の強い亜人種から『兄貴』と呼ばれているのだ、何かしらの特殊能力を持っているかも知れない。

まあ、きつと空鳥氏は大丈夫だろう。寧ろ彼らに甚大な被害が出るかもしれないと不安がよぎる。

「オイ、てめえか？ これを投げたのは」

「ほう、大した洞察力だ」

「オマエ自分の足元を見直せ！ どうやったらこんなもん釣れんだよ！」

ベコンツと三色重なった長靴に黒い長靴が追加された。

「ご尤も、と思わず僕とノラちゃんは頷いてしまふ。」

じろりと、視線だけをこちらに向ける空鳥氏。だが、そのまま何も言わず垂れていた釣り糸を巻き上げ、釣り糸の先を確認する。先端は釣り針とタコのオブリエのような物がくっ付いていた。

「仕掛けは間違つてないはずだが」

「仕掛け云々の話じゃねえ！ どうしてくれるんだコレ！ コラア」

バツと履いていた白地のズボンの右太もを引張り強調する赤バンダナ。そこには汚らしい足跡がくつきりと付いていた。

「余り見ない柄だな」

「誰がこんな柄買うんだよ！ 汚れの後だつての！ オマエの所為だつての！」

「言いがかりも大概にしろよ、俺に何の罪があると言つんだ」

「罪しかねえだろうが！ クリーニング代と迷惑料で許してやろうと思つたが勘弁ならねえ。ちよつとツラ貸せや」

「おらよ」

ゴツ。と、いきなり頭突きを食らわす空鳥氏、相手がうつたえている隙に間髪いれず、右手で襟首をつかみ。

「原子力発電キツク」

気の抜けた発言と共に、しかしズドゴオツつと勢いよく、左の義足で股間を打ち抜いた。

「ぐあああああああ！」

赤バンダナに電流奔る。その体には痛烈な痛みが走り回っていることだろう。

それは正に、原子力発電が織り成す強力な電気になぞらえた技名である。

ブツちゃけて言えば、ただの金的。

男の勲章を強打された赤バンダナは、プルプル震えながら「あとか「う」としか言えていない。

空鳥氏は実につまらなそうに、そんな赤バンダナを川に放り投げる。

「うばあああああッ」

どこぞのラスボスが地獄の淵から帰ってきておいて尚主人公に敗北したときのような声と共に揚がる水しぶき。だっぽーんと水面に波紋が広がる。

「あ、兄貴イ。てめえ！ よくも兄貴をッ」

「てーい」

「うわあああああああ」

更にトカゲ男が水面へダイブ、丁度顔を出した赤バンダナにぶつかり共に水面下へと姿を消す。

残りの一人は、菓子袋を片手に佇む豚頭の亜人。

「ボーグか。これは骨が折れそうだ」

「ぶ、ぶひつ。オラ何もしてねえだ！」

「そうは問屋が卸さない」

「ぶひひひひひ、オラ泳げないんでぶううううう」

ダッパーンと豪快な音と共に川へ突っ込む豚頭。

その質量が故に前二人よりも派手に水面を揺らした。

ついでに浮上してきた二人を再び水面下へと押し込む。

絶対狙ってやった。

「テメエ、覚えてろよ！ そのツラ覚えたからな！」

「かならず、ぶ、ぶ、う、ふくしゅううううううううう」

「お、およげない。おぎよべない。」

二人ほど言語すら不自由になっている。丁度流れが速い場所へと落とされたのだろうか、凄まじい速さで下流へと流されていく三人組。

しかし、その強気もすぐに萎れる。

「やめろっ まって、ごめんなさい、やめてやめてやめて」

「ふはははははは」

さつさと岸に上がればいいものを、そうはさせんと空鳥氏はどこから取り出した銚でつんつんしている。

そんな様子を眺めながら、思い出したかのようにノラちゃんが口

を開く。

「今日の水温幾つでしたっけ」

「えーっとね……二だね。軽く死ねる温度」

「大丈夫だろ」

「あの……リザードマンって変温動物じゃあ？」

「「あ」」

『兄貴ィ……俺はもう駄目だ……』

『あきらめるなあああ さっきまでのいきごみはどこへいったあああああ』

『およげないでぶうつつ ぶぐぶぐぶぐ……』

「やつべ、死んだら殺人になっちまう」

「急いで急いで！ どんどん流されてますよ！」

十分後、丘が上がって尚股間を押さえっぱなしの男と、体温の急激な低下で眼が濁ったリザードマン。

水を飲んで更に腹部が肥大化した豚が河川敷に取り残された。

「あ、危なかった…… もう少しで犯罪者の仲間入りだった……」

「時雨は生きているだけで犯罪だがな」

「どういう意味ですか、それ。……いえ、言わなくていいですが」

「そうか……」

何でそこがっかりするんだろう。空鳥氏は色々失礼だと思う。

三人組を河川敷に引張り上げた後。荷物を纏め、自分達の出せる最高の速度でその場を後にした僕たちは屋敷へと帰ってきた。

「ただいま帰りましたー」

先頭のノラちゃんは息が全く乱れていない様子でまだ余裕がありそう、空鳥氏は既に呼吸を整え終わっていて、僕だけが肩で息をきる状態だ。呼吸の乱れは走っただけの理由ではない。

基礎が違う獣人と度胸が違う空鳥氏に比べると幾分情けないような気はするが、空鳥氏のようににはなりたくない。

ガラガラと扉をスライドさせて屋敷内に入るノラちゃん、空鳥氏と続いて僕も中に入る。

「おお、やっと帰ってきたね」

と、二階の手摺に膝をかけ、逆さまにぶら下った人が視界に入っ
た。

胸元まで捲れ上がったタンクトップに短パン姿というラフな服装。その豊かな胸が重力に従いとてもけしからん有様となっている。薄い金色の髪を黄色のカチューシャでおさえている。大事にしているのか、使い込まれた印象がある。

力強さを感じさせる太い眉と、ぱっちりと見開いた大きな目が印象的。

「何してるんです、麻白さん」

彼女の名を麻白優という。名前の響きだけであれば何処の大和撫子かと思ってしまうような名だが、現実は無常にも完全に名前負けしている。

「んー？ 暇つぶしだよ。私だけ置いてけぼりくらったからねー」
唇を尖らせながらふてくされた態度を取る。仲間はずれにされた事を根に持っているようだ。

「三回起こしたぞ」

「覚えてないよ」

「八回殴ったぞ」

「そんなに！？ どおりで頭が痛いと思っただよ。寝すぎたのかと思っただじゃないか」

空鳥氏はトントんと階段を上り、麻白さんの傍まで行っただかと思いきや。唐突に釣竿のグリップで麻白さんの股間を攻め始めた。

「きゃああああっ！ やめてやめて、私の本性が目覚めてしまう
！！」

「はっはっは。堕ちてしまえ」

何を考えているんだろう、この人は。二階から落ちるのとかけていることは解ったが。

僕はそつとノラちゃんの視線を遮る、この幼けな少女に大人の汚い側面を見せたくなかったのだ。

「麻白さん、声が喜んでませんか？」

「うゝん、考えないようにしようね」

ホント仲が良いのか悪いのか判断に困る。

「まあ馬鹿げたことは置いといて。何か良いもの釣れたかい？」

ふと真顔になった麻白さん、彼女は市内のハンター仲間からも一目置かれるトレジャーハンターであり、お宝に対する天性の嗅覚とも言えるものを持っている。

都内の地下に、異界へ広がる大規模迷宮があり。そこから幾つかの漂流物を持ち帰ってきた数少ない人でもある。

だが、今は股間を押さえて空鳥氏の責め苦を受けているという滑稽極まりない姿を晒している。

「僕が小魚三匹、律動を繰り返す妙な色をした石一つ、魔導結晶一つ。ノラちゃんが奇怪な魚一匹、不思議な模様が彫られた空き瓶が一つですね」

「ん？ 空ちゃんは？」

「……」

顔をあらぬ方向へ向ける僕とノラちゃん。

「長靴四つだ」

「ブツ」

あ、駄目だ。思い出したらまた笑いが込み上げてきた。

クスクスと軽い笑いが起こる中、麻白さんは言った。

「い、いや。普通の長靴じゃなかったとかだよな？ レプラホーンのお手製だとか……」

「ない、普通のゴム長靴だ」

啞然とした表情を浮かべている。どうやったら釣れるの……という、心の声が聞こえてきそうだ。

「なんだ？」

空気がぴりりとする。全身に微弱な電流が流れたような、体の産毛が逆立つような感覚。空鳥氏の怒気の所為だろうか、いや違う。何だろう、何かが近づいて来るようなこの感覚……

「いけない！」

咄嗟にノラちゃんを抱き寄せて身を屈める。

「わふっ？」

ノラちゃんが奇妙な声を上げる。それは直ぐに来た。起こったと言った方が正しいだろう。

「ごおおん」という屋敷全体の揺れる音、地震だ。そんなことはこの地に住んでいるものは誰でも解る。

腕の中の少女はびくりと全身の毛を逆立て、ぶるぶる震えている。この子は地震の時、近くに誰かが居ないと簡単にパニックを起こしてしまう。前まではその近くに居る誰かは両親であった、その両親が近くに居ない以上、他の誰かが傍に居てやらないといけない。

だから、こんな小さな子が屋敷の大家なんてやってるのだ。

常に誰かが近くに居るように、常に誰かの近くに居るように。

しかしこの子モフモフだな、抱き心地満点じゃないか？ 獣人の利点の一つだよなこのモフ感。

変な方向へ流れ始めた思考をバキイという乾いた木材の悲鳴が現実に取り戻す。

同時に、「うきやあ」「むう！」という声。

地震でどこか壊れたのだろうか、どすんつという大重量の落ちる音。揺れが小さくなると同時に二人の安否を確認する。

だが、そこで眼にしたのは

空鳥氏が麻白さんに見事なキ　肉バスターを決めてソファに鎮座するという光景であった。

さっきまで二人が居た場所の手摺が壊れている、宙に投げ出されたのだろうということも解る。

だが、どうやっても　ン肉バスターにはならないだろう。

「どうしてそうなった！」

「咄嗟の対応としては及第点だ、悪くないフィニッシュだった…しかし、やはり地震があつたな。午後は忙しくなりそうだ」

「どうやったのか、とは答えずただ自分の行動を評価する空鳥氏。どすん、と麻白さんを横に転がした。ぴくぴくと首を押さえ悶えている。

仮にも麻白さんは女性。先ほどもそうだが彼女に対する扱いが酷いのではないだろうか。

そんな視線に気が付いたのか空鳥さんは言い放つ。

「妖怪を親に持つ奴だぞ？ この程度は大丈夫だ」

「いや、確かにそうだけどもさ」

イテテと呟きながら首を回し、むっくりと起き上がる麻白さん。常人ならば昏倒しているのではないだろうか、あの一撃を食らいながらも数秒で回復するとは大したものだ。

「もう一寸でもいいから愛のある行動を取って欲しいな。空ちゃんだけだよ、こんなに扱いが酷いのは」

「ならその呼び方を止める、敬称をつける様と呼べ、返事はハイかイエスで答える」

「イエッサー、空鳥様」

「ぶん殴るぞ」

「どうしたらいいの!？」

「多分、どうやってもぶん殴られる。」

「あ、あの……」

「ん？ ああ、ごめん。もう大丈夫だよ」

「いえ…… はい、ありがとう御座います」

僅かに顔に朱がさしている。恥ずかしかったのだろうか。

抱き心地よいモフモフが離れていく、少し残念な気がした。

コホンと咳払いした後、手を打ち鳴らして場を取り直すノラちゃん。

「じゃ、そこら辺にしてくださいね。お昼ごはんの準備しますか

ら」

「今日のお昼はなあに？」

欠食児童のような台詞の麻白さん、戦隊モノでは多分イエローだ。
「ざるうどんです。麺は冷凍してあるので茹でたら直ぐ食べられますよ」

「よし、手伝おう。お湯を沸かせばいいのかな？」

それ以外手伝うことが無いのか、それともそれ以外手伝える事が無いのだろうか。

薬味を切るとか、生姜を摩り下ろすとかあるだろうに。

そういえばノラちゃんが家事全般をしてくれている為、彼女以外の人間が料理の腕を振る舞うことなど先ず無い。

「いいです」

「いいんだね？」

「いいです。余計なことは」

ばつさりと切り捨てられる麻白さん。どんだけ邪魔者扱いされているんだろう。

「遠慮しないで！ 私だってお湯くらい沸かせられるよ！」

何故そうまで力強く言うのだろうか。寧ろそれしか出来ないんじゃないかなだろうか。

ノラちゃんの態度からして、もしやそれすらまともに出来ないのだろうか。

「訂正しますね。手伝いは要らないんです」

やんわりと、しかし確固たる意思を込めた追撃。ぐっさりと心に突き刺さる一言を受け、滂沱の涙を流す麻白さん。

「あ、からとりさんは手摺直しておいてください。しぐれさんのお魚も新鮮な内に捌いちゃいましょ」

家の事となるとこの子強い。あれこれと指示を出すし的確だ。大家の少女に頭が上がない成人と言うのも何処か滑稽な気がした。

「了解」

僕と空鳥氏は声を揃えて言った。

世界は喜劇が大好きなようだ（前書き）

ちょっと短い今回、これで主要人物は出揃うかな。

世界は喜劇が大好きなようだ

前に教授がこんなことを言っていた。

『昔は餛飩のことをウンドンと呼んでいたらしい。そして、仕事の下手な人を『餛飩食らい』と罵る言葉があったそう。言葉の響きからして若しかしたらそれが訛って『どんくさい』と変化したかもしれないね、いや、詳しくは知らんけど』

そんなことを思い出した切欠は勿論昼食がうどんだったからであり、麻白さんがグーで握った箸を操りながらもツルツルと滑るうどんと格闘していたからでもあった。

よくアレで食べられるなあと眺めていると、そんな様子を見かねた空鳥氏が口を開いた。

「猿よ、まともに箸も使えんのか。やはり文化レベルが低いな、程度が知れるというものだ」

「何でそこまでいわれなきゃいけないのよ！」

大皿にこんもりと盛られていたうどんの大半が各人の胃袋へ片付けられ、残すところあと僅か。華美で無い程度に施された金箔の彩りが映える黒い漆塗りの箸を手に、空鳥氏は流麗な仕草で自分の小鉢へとよそおうとする。が、それを乱暴な割り箸が引き止める。

「貴様！ 何をする！ これは私のものだ」

「ならば、殺してでも奪い取るまでよ！」

そんなことで殺すな。と、心の中でのみ突っ込む。言葉にしないのはどうせ本気ではないからだ。

ぐぐつと皿の上で繰り広げられるどうしようもない争い。

僕は止める気にもならず食後のお茶を入れに台所へと向かう。ノラちゃんは一足先に席を立っていった、日課と成っている庭の水撒きをしているだろう。

それにこれくらいは自分でも出来る。薬缶にお湯が入っているのを確認、戸棚から茶葉を取り出し急須へ投下、湯を注ぐ。

「くそつ、取られた！　だが余りの稲荷寿司は譲れないわ！」

「馬鹿め、これは私のお稲荷さんだ」

ぶばつ、と何かを噴出す音が聞こえた。一瞬手元が狂いこぼしかける。

いかん、危ない危ない危ない……

「汚いぞ、猿」

「げほつ、げつほ……　変なことを言う方が悪いんじゃないの」

「鼻、でてるぞ」

「うどんが！？」

「うどんが」

うつを「マジだー」とか聞こえてくる、ああいうのさえ無ければもっと魅力的に写るだろうに……　色んな意味で残念な人だと改めて認識する。

食器棚から人数分の湯呑みを取り出し、茶を注ぐ。お盆に乗付けて再び談話室に戻り、そつと席に湯呑みを置く。

麻白さんは鼻から取り出したうどんをどうしようか迷っているように、そんな様子に冷ややかな眼を向けていた空鳥さんはボソツと言った。

「食うなよ」

びくりつと震える麻白さん。ぎぎぎ、という音が聞こえて来そうなぎこちない仕草で首を背ける。

「も、もちろんさあ」

食う気だったな、間違いなく。色気より食い気なのかな。

なんとなくテレビのチャンネルを変える、地震で何らかの異常があれば直ぐに民間のテレビ局が中継をしてくれる筈。まずは情報収集という事だ。

ずずー、ずびーと茶を啜る音。

調査の結果、神代の遺物である可能性が
現在、学園では厳戒態勢で

この世界が、何故拒絶反応を起こさないのか誰も知る事は無く

甘くてクリーミィで、こんなものを貰える私は特別な存在である

「ん？ 待て、二つ前に」

「あ、はい」

それ以前に最後、何か変なものが映ったような……

学生達は口々に『真の自由』『公平なる民主主義』等と叫び、統治機関に主張を繰り返しております

「ああ、朝刊にもあった学生運動ですね」

「そうだがそこじゃない。画面奥、左端の奴だ。見たことないか？」

「んん？」

空鳥氏の言うとおり、そこには見覚えのある人影があった。次の瞬間画面が切り替わってしまったが間違いないだろう。

「教授……だよな」

「あの帽子はそうだと思います」

少ししか映っていなかったのに良く見えたなあ。

「人質！？ ちよつと、よく見えなかったんだけど」

「学園に立てこもりか、意外だな。昨日今日でここまで過激になるとは」

「新聞にもありましたけど、あそこまで事が大きくなったのは昨日かららしいですよ」

うゝむ、と腕を組んで左手を顎に添える空鳥氏。

「こりゃ、扇動する奴が居るな」

「あの……ちよつ」

「なんだ？」

「何でそんなに落ち着いてるのよ！」

「慌てたところでどうにもならん」

「そうですね、一応命に別状は無さそうですし。そもそもどうしろと？」

そう言い、またチャンネルを変え始める。じたばたしたってしょうがない。何故なら僕らは当事者ではなく部外者、余計な首を突っ込むべきではない。

大体空鳥氏が首を突っ込んだらどうなるか解らない、そっちの方が危険なのだ。

空鳥氏が動くということはそういう制約を背負っている。

「それとも……行つていいのか？」

「ごめん、取り消す」

その結果どうなるのか想像できたのだろう、麻白さんも大人しくなった。

「それよりも問題はこれだろう？」

空鳥さんは長テーブルの下に置かれたソレに視線を移す。

そこにはさつき僕が釣り上げた『どっこんどっこん』と律動を繰り返す妙な色の物体。

「これだけはね……私も良くわかんないんだよね」

「俺が見る限りでは魔術には関係無い。若しかしたら、どっかの神代級遺物かもな」

「まさか、そんなものがこんなところに？」

「有るところにはあるもんさ」

神代、それは神が存在した世界の時代を現す。漂着物の中では最上級クラスの物だ。

有名な伝承の実物だったり、超常現象を引き起こすものなど効果は多岐に渡り、高額取引の対象であり、第一級の危険遺物に匹敵するものだ。

実際、異種族間戦争時に幾つかの宝具の発動が確認されている。僕が目撃したのは『竜の宝珠』伝承と同じように竜の持つ宝珠で

あり、自在に天候を操る。

大雨、大風、雷という大自然の猛威を嫌と言つほど味わつたものだ。

だから、嘗て人類は敗北したのだ。

その言葉の意味に、ぞわつとした。それが本当ならば、これほんでもない物だ。

手に取り、矯めつ眇めつ調べる。小さな穴らしきものがあるだけだ。

だが、これだけでは一体何の為にあるのか解らない。

「何かの部品だとかじゃないかな」

「だから何のだ？」

「わかんないよ」

あーでもない、こーでもない議論する。教授が居てくれたら何かしらの助言をくれたかも知れないのに。

「あの…… すみません、ちょっといいですか？」

玄関から申し訳なさそうにノラちゃんが声をかけてくる。

「どうしたの？」

「ええと、ちょっと庭に来てください。見れば解りますから」

「「「？」「」」」

どうも要領を得ないうえに歯切れが悪い、よっぽど説明しにくいのだろう。

席を立ち、ノラちゃんに続き庭に出る。

ぱっと見て庭の中央に池があり、更にその真ん中に立派な桜が植えられた小島がある。桜の下には長椅子が置かれているが吹き曝しになっている為、色あせてボロボロだ。

わびさびと言つには少し違うような気がした、放置しているだけなのだから。

何時も通りであれば『長閑な場所だ』と、ただそれだけで終わっ

てしまうような庭に、今日は闖入者の姿があった。

「アレです」

「この前みたいに死体、じゃあないな」

「人、でもなさそうですね」

庭に浮かぶ小島、その桜の根元にソレは居た。

生物では無い事を主張するような青銅色の髪、生きる事を止めたような青白い肌。

これから戦いにでも行こうとしていたのか、意匠を凝らしたガンレットと具足の装い。

小顔で整った顔立ちをしている。少年と言われればそう見えるし、少女と言われればそうも見える。

だが、最大の特徴は胸元だ。人間で言う肋骨の部分をがばっとこじ開けたらこうなるのではないだろうか、本来ある筈の臓器はそこには無く、血液の一滴も垂れていない。

黒色の内壁に、何かと繋がっていたと思われる赤い管と、骨格らしき物が露骨に空気にさらされている。

「ゴーレムでもないな。アレは生身だ」

「本当に生物なの？ 人形ではなくて？」

「ええと、どうしたらいいと思いますか？」

僕はそんな会話もまともに聞いていなかった。ぽつかりと開かれた胸元を凝視していたからだ。

無残なそれから連想したのは、家族の死とその最後の姿。

ふらふらと引き寄せられるように近づき、その体にそつと触れる、肌は金属のような冷たさ。

僕がこれから何をするべきか、脳裏に天啓の如く浮かび上がった。きた。

『これが必要なのだ』と。もしかしたら、この律動する妙な石はその為に今、僕の手にあるのではないか。この子の為に、これは僕の元へと来たのではないか。

その奇妙な勘は的中していそうな予感があった。

左手に持った妙な石を、恐らくは心臓部となるものをそっと入れる。

ぞわぞわっと黒い内壁が蠢き、赤い管が心臓部に繋がると瞬く間に飲み込まれていった。

手を抜くと、肋骨はそれを待っていたかのように自動的に閉じる。どくんどくと胸が鼓動する、初めて買った玩具が動き出す時のような興奮が僕を包んでいた。

期待に胸を膨らますなんて、随分と久しぶりの感情だった。

青白かった肌は次第に色を取り戻し始める、カッと眼を開けた。動き出したのだ。

一体どういう仕組みで動いているのか皆目検討も付かないが、今の世の中に説明が付かないものなんてあり過ぎるくらいだ、そのことにはそこまでの違和感を感じない。

「起動完了、確認しました。起動者を認識、個人情報登録します」高く、凜とした声。だが抑揚の無い機械染みた響きであった。

先ずは挨拶でもと、口を開こうとし　いきなり。ぐわしと頭を掴まれ、そのまま開いた口が口で塞がれる。

何の脈絡も無く、それも実に強引に。

キスされた。

「あ」

「ちよっ」

「個人情報の採取を完了しました、固体名『タロス：ナンバー？』名称を決めてください」

「なっな、ななっ」

「了解、私の名は『ナナ』登録完了しました」

「待て、今『タロス』と言ったのか？　あの青銅の人種か！？」

珍しく空鳥氏の感情的な声、その稀な事態に精神ダメージから復帰する。

「ナンです、それ？」

「ゼウスが人の前に作ったとされる人形だな、どこまで正しいか解らんが。しかし滅びた筈だぞ？」

空鳥氏の怪訝な表情、今日は珍しいものをよく見る日のようなのだ。

「Yes、我々は滅びました。しかし『箱庭』であるこの場では、伝承は確かな指標とはなりえません」

「奴か？ 人には制限かけておいて好き勝手やりやがって」

「何？ 誰の話？」

話の流れについて行けなかった麻白さんが首を突っ込む。

「うるせえ、猿は引っ込んでろ」

突っ込んだ首をぐるりつと真後ろに捻られる。ごきごきつと不吉な音が鳴る。

さつき大打撃を受けたのに今度は捻りを加えるとは、無茶をする。ぐおおおおおと呻きながらどたんばたん地面を転がる麻白さん。個人的にはそんなことより、さつきからじとーつとした眼でノラちゃんに睨まれている事が気がかりだ。

「ど、どうしたの？ ノラちゃん」

「時雨さん、破廉恥です」

何故、僕が攻められる。

ちら、と隣を見る。

「なんでしよう。主殿」

「いや…… なんでもない」

世界は喜劇が大好きなようだ。それもなるべく滑稽な。

世界は喜劇が大好きなようだ（後書き）

ご愛読有難うございます。

詳しい設定や具体的に過去何があったのかはもうちょっと後でやります。

知りたくなかった

今、僕は長椅子の左右からぎゅうぎゅうと圧迫されている。

片方はナナ　僕が主らしい　もう片方はノラちゃんだ。

さっきからナナが『主殿』と言ったびにノラちゃんからの無言の内に放たれるプレッシャーが強力なものになっていく、親の仇見るとような眼が実に怖い。

ただでさえノラちゃんにじりじりと座る距離を詰められ、それをナナが真似をしてノラちゃんの怒りに拍車をかける。

それを何度か繰り返し既に密着状態である。嫌なデフレスパイラルが完成していた。

さっきからノラちゃんの反応がようわからん。

あれかな？　獣のヒエラルキー的なものが関係してるのだろうか。突然現れた奴に自分の領域を荒らされるのが我慢ならんのかな。

膠着状態を打ち破ったのは麻白さんだった。

「えっと、タロスのナナでいいんだよね？　これからどうするの」

「愚問であります、我が存在意義は主殿の為。例えこの身が砕け散ろうと最後の瞬間まで尽くすであります」

ちよっ、ノラちゃんの眼が怖すぎる！　瞳からハイライトが消えてるから！

「尽くす女だねえ、ナナたん。あ、女の子であつて？」

「性別は固定されていませんが、私は女性型として作られましたから間違いではありません」

空鳥氏がニヤケ面でこちらを見ている。くそっ、楽しんでやがる。

「まあ空き部屋はまだ在るんだし、問題は無いだろ」

「そーですねえ……」

不機嫌を隠そうともせぬノラちゃん。

大問題だ。

「いえ、私如きが一部屋を与えられるなど恐れ多いのであります。主殿の部屋の押入れで十分であります」

「さり気無く自分の意見を通そうとしている!？」

「じゃあ、それでいつかあ」

麻白さんめ、他人事と思ってからに。

「大丈夫だ、問題ない」

「うるせえ！」

くそ！ 余計なことを、ノラちゃんが更に不快感を強めているじゃないか。

ぎちぎちという音が聞こえてくる、口内の肉を噛んでいるのか!？

あと僕の太ももを抓るのはやめてくれ。

打開策、打開策は何だ！ いや、そうだ。余りの事態にそもそもの質問を忘れていた。

「えっと、ナナさん。主って何で何故こんなところに居てそもそもタロスはゴーレムじゃなくて人種でしょ？」

「落ち着けよ」

冷静な空鳥氏、だがその冷静さがムカつく。

ナナは首をかしげて『訳が解らない』と言った感じだ。無表情だから仕草が頼りだが。

「質問を整理します、主とは何か、何故ここにいるのか。私ことタロスの詳細説明をキボンぬでよろしいでしょうか？」

「一部おかしい部分があるような気もしないでもないけどそれでお願ひ」

では、と一拍置いてナナは語り始める。

そもそも、『タロス』とは何か。

それは神話において、ゼウスが現人類の前に「金の人種」「銀の人種」「青銅の人種」を造ったという物語のうちに出てくる「青銅の人種」のことである。

ナナは青銅人種最後の残りで、失敗作の更に未完成品だと言う。

ちなみに逸話の中には近づく敵に身体から高熱を発し抱き付いて

焼いたとかあるそうだ。

「廃棄される予定だったのですが、何の因果がこの地へと来ることになりました。ここでの経験が何らか変化を生むのを望むだそうです」

「つまり狙って送られた、と？」

訝しげな顔をしている空鳥氏が何か考え始めている。

「YES、残念ながら上位権限によりロックが掛かっているので名前を申し上げることは出来ませんが。企画者はそう述べていました」

「その時点で大体誰か解るな……」

断定するような空鳥氏、それには同意だ。

「ええ、十中八九『黄昏』の仕業ですね」

「愉快だあ……」

「ていのいい厄介払い兼暇つぶしと思われれます。なおここでの種族は『神造人間』と……」

「そいつ絶対アニメ好きだろ」

「主神殿が」

「ゼウス何やってんのおおお！」

「主に神殿でネットゲーと他の方達と気になった書物の意見会だそうで」

あるのか、ネットゲー。後どんな書物が気になるが碌な物じゃないだろう。

「今、オリュンポスの神々が一気に俗っぽくなったな」

「あ、あと書物を兄に貸すと濡れて帰ってくるとかで悩んでました」
「もうやめてっ、それ以上暴露しないであげて！」

ナナが主とか言い出したのも大体解った、原因は神だ、絶対そうだ。

最初に見たものを尽くすべき相手と刷り込んだな、さっきの発言がアレだったのも原因は神か！

「奥方は主神殿が不貞を働かなくなったので好意的ですよ？ 態度も軟化して嘘みたいに優しく」

「もういいってば！」

くそっ、だからなのか？ 神話で散々浮気していたゼウスがおとなしくなったのは。

二次元文化の仕業だとも言うのかあああ！ 知りたくなかったよそんなこと！

事件の足音（前書き）

ストックが切れた、ちょっと更新は遅くなりそう。

事件の足音

オリュンポスの神々の暴露話で全てが大体理解できた。
それと同時に何か大事なものを神が失ったかどうかは知らないが。

閑話休題。

とりあえず、晩の買い物とナナの衣服の為に商店街へと出る事になった。

メンバーは僕、ノラちゃん、ナナの三人？ だ。

うん、軽く悪意を感じる。

空鳥氏曰く。

『しょうがないだろう？ ナナたんは主である君の傍から離れず、食事準備はノラ公の仕事のうちだ。ならば君がついて行かなくてはならないのは、あきらかじゃなあないかあ』

確かにそうかもしれないし、納得したくないが受け入れるしかないのだろう。

出かける折、背中にヒヒヒという笑い声が聞こえてきた、完全に楽しんでいる。

天罰が下ればいいのに。

しかし天に住まう神々の一部の話を聞いてしまった後では期待できそうも無い。

僕が真剣に何らかの方法で一泡吹かせることを決意した頃。

いつの間にか目的地についていた。

商店街、と言われて想像するようなアーケードなんて無い。

昭和初期のような、店が乱雑に立ち並ぶその区域はいつの間にかそう呼ばれるようになっただけだ。

食品だけではない、画材屋もあれば本屋、楽器屋、生活雑貨の類を置いている店。

信楽焼きの狸がでんと店先におかれている店などは何を扱っているのか訳がわからない。

そのへんは通り抜けて今日の目的の一つ、ノラちゃんが吊り上げた怪魚を引き取ってくれるであろう場所へと向かう。

「ごめんください」

「やあ、ノラちゃんに神崎君。そちらの方は？」

「主殿！ 怪物であります」

「お口にチャックうううううう！」

べしつと咄嗟に口を封じる。

「ははは。大丈夫、初めての人にはいつものことさ」

怪物と言われた店主はとても良い声の人面魚だった。

彼が営むのは魚屋である。初見では種族的にどうなのだろうかと思っようなそれも、もう慣れた。

慣れてしまったと嘆くべきなのだろうか。

店先にせり出した水槽から顔を覗かせ、ふちに胸びれを乗て身を乗り出す。

えら呼吸と肺呼吸の両方を使えるのだろう、平然と会話をするその姿に驚かない存在は中々居ない。

最近の悩みは近所の悪がきが水槽にごみを入れること。

「今日釣り上げたこの怪魚を引き取っていただきたいのです」

ごとりつと新聞紙に包んだ本日収穫物を差し出すノラちゃん。

「ああ…… またか」

それを見てなにやら難しい表情を浮かべる店主。

いまさらだけど表情豊かな人面魚って気持ち悪いよな、言わないけど。

「また…… ですか？」

はて、何か異変でもあったのだろうか？

今日の午前中だけで散々異変があったような気もしないでもない。されど、それが日常茶飯事な為か異変を異変と認識していないのかもしれない、もう少し気をつけるべきか。

「ここ数日多いんだよ。生態系が狂ったのかもしれない」

先日はピラニアが異常発生するということがあった。

だがこの季節の水温の低さ故、川一面に死骸が浮くという惨事。

河川敷にまで打ちあげられるほどの量だった為、その数の凄まじさが解るだろう。

「やはり見る限り、この怪魚も鯉が変異したものだね……　それも魔力の所為で」

「魔力ですかあ……　しぐれさんが結晶釣ってましたよね」

「いや、結晶程度で変異しないさ。人災の可能性もある、私から機関に連絡をいれておくよ」

「それはどうもありがとうございます」

「僕は橋姫のばあさんがまた嫉妬に狂ったのかと思いましたよ、あの人は妖気だから違うんでしょうけど」

ここらへんで軽く整理しておこう。

魔力とは魔に属する力とでもいえばいいのだろうか。RPGで言うMPだ。

魔導結晶は魔導機の燃料などに使われる魔力の結晶とでも覚えておけばいい。

これを保有し自在に行使できるものが俗に言う魔道士や魔法使い、細かい分類は専門ではないので横に置いておく。

さて、魔力を保有とは言ったものの例外を除いて生物は多かれ少なかれ魔力を持っている。

カリスマや魔性の美も魔力を持っているからで、それに対する抵抗力が低い人ほど引き寄せられるものだ。

精神と密接にかかわる肉体の変化は顕著だ。

自分の肉体と違って他者の肉体をどうこうするのはかなりの高難度、他者の精神がどうのこうのと教授が言っていたが例によってくどいので話半分に聞き流した。

扱いを誤れば危険であるが、このごちゃまぜになった世界を人類が生き抜いていくために学び、適応した力とも言える。

利点があれば欠点もある、使用者の精神に強く作用する点だ。

例えば使用者がいくら魔力があろうと『こんなことは出来ない』
と思ってしまうば、初歩の魔法だって出来ない。

逆に言えば『出来る』という思い込みと相応の力があれば隕石だ
って呼び寄せる。

そんな大魔法使い未だ人類から出てはいないが。

嘗ての常識から脱却出来ない才能があっても使えない、才能が
あっても魔力が足りなければ使えない。更に自信家の魔法使いが一
度敗れると今まで使えた魔法が使えなくなったりという話もある、
新しい可能性だからこそ壁にぶち当たり続ける力だ。ああ、一応超
能力も魔力を使っている。

妖気は妖怪独特のものだ、魔力とは少し違い妖怪が生きるために
必要な力であり、人の『恐れ』『畏れ』などから変換される。妖気
はそのまま妖怪自身の實力でもある。

話がそれた、今回重要なのは魔力が精神に強く作用すると言う点。
元より魔に属する魔族や魔人は線を引くとして、人間と亜人には
大して差は無い。

だからこそ大きな魔力が働いているときは、本能に任せた存在であ
る動物が一番影響を受ける。

本能に任せた動物が魔力の影響を受けるとどうなるか。その結果
が今回の魚の怪魚。

そう、肉体が変異するのである。

本質からズレてしまうのである。

変異して異質な存在となった怪魚はどうなるか？

異常な進化を始めるのである。

眉？ をしかめて真面目な表情になった店主が口をひらく。

「ちよつと危険かもしれませんが、だんだん悪化してきている。末期
症状なもののを食べる人がいるとは思いますが…… 初期症状の魚はなか

なか解りません。もし、口にしていたとしたら」

その先はあまり聞きたくない。

「人間も獣人も、変異しかねない」

事件の足音が、聞こえた。

事件の足音（後書き）

感想お待ちしています。

四月四日 脱字修正

なかったことに

「さ、次は晩の材料とナナの服だね。いやはや、女の子の買い物は時間掛かるから急がなきゃ日が暮れちゃうよ」

事件の足音が聞こえたような気がしたが別にそんなことはなかった。

きつとそうだ、そうに違いない。

「聞かなかった事にしようとしなくてくれないかね？」

「無かった事に」

「なりません」

チツ、逃げられなかったか……

「まあ、あれですよ。機関に連絡をいれるんで御座いましょう？」

「末期の魚が出たのはこれが初めてだからね。私は、てつきり君が調べるのかと思っていたよ」

「何故ですか？」

「え？ 探偵だからじゃないのかい？」

「なんだろう、何かがオカシイぞ。」

「んん？ スミマセン、探偵と申しましたか？」

「え？ だって探偵だろう？」

「なんだろう、何かがオカシイぞ。」

「んん？ スミマセン、誰が探偵と申しましたか？」

「君のことさ、時雨君。町でも評判の請負人にして名探偵だと。最近出来た同居人も認めるほどだよ」

「どんな噂が流れているか知りませんが。尾ひれどころか両足が生えて一人歩きしているとは思え……」

「って、同居人？ こんな生臭い場所に？」

「あの、しぐれさん…… ちよつと」

くいくいっと袖を引かれる、ノラちゃんが戸惑った表情で此方を見ていた。

「アレに見覚えありませんか？」

ついつと視線を向ける、その方向にはナナがしゃがみ込んでナニかを観察している。

後ろから覗きこんでみる。水が張られた発泡スチロールの中に、確かに見覚えのあるものがイタ。

五色に彩られた体。

胴体らしき中心部に一つの眼球を持つ……

ドでかいヒトデ。

「デ、デカラビア……なのかな？ 何してんだよ、こんなところで」

『よしてくれ』

デカラビアは拒絶した。

『今の私は、ただのヒトデだ。それ以上でも以下でもない』

なにやら琴線に触れたらしい。

「いや、ホント何してるんだよ。魔界に帰ったとばかり思ってたけど」

ソロモン72柱の悪魔の1柱、デカラビア。

本来ならば五芒星形の星の中央に眼が付いた姿である彼が、何故ヒトデなのか。

「これは力を失ったのでありますね。信心も恐怖も薄れた今の世で、原形を保つのも一苦労なのであります」

『フツ…… 時代の流れとは、恐ろしいものだ』

「ごまかしたであります」

神の事情に詳しくそうなナナから回答が得られた、悪魔も元を辿ればどっかの神だしなあ……

『悪魔がこの世の規則ルールに縛られるというのも、滑稽な話よ……』

「そうでもしなければ今の世は直ぐに滅亡してしまうであります。

というか世界に出てこられるだけまだマシだと思っべきでありますよ」

なんか話が進んでる。

「同居人ってデカラビアさんだったんですね…… ちよつと納得です」

「ああ、違和感ないもんな」

「そうでなく」

「なんだねノラちゃん、そうでなければ誰が好き好んで生臭い店主と暮らすんだか。」

「声に出てるよ、時雨くん」

「おっと」

「ほんとイイ性格してるよね、と店主はどこか呆れた声の調子だ。」

「ところで、デカラビアはさっきの話聞いてたよね？ 悪魔でこんなこと仕出かす奴に心当たり無い？」

「怪魚を目玉の前に突き出してみろ。」

「この際だ、ついでに聞いておこう。」

『この私に同族の情報を売れと？』

「いや、知らないならいいんだけどね。知らないなら」

『……』

「ほら、アレが怖いんですよ。アレが……」

「なるほど、黒い笑顔でありますな。」

「何か失礼なことを言いましたか？」

「「いいえ、特には」」

「そう？」

『魚の件については、私の心当たりには居ない』

「そっか、ありがとうデカラビア。この怪魚あげるよ」

『要らん』

「そっぴらずに、魔力の回復になるんじゃないの？ まあ、どの位

回復するか解らないけど」

『何のつもりだ、貴様』

「何って、ただの『お礼』でしょ？ そんなに警戒しなくてもいいんじゃないかな」

『クッ……』

「成るほど、噂通りだ」

「悪魔に一步も退いてませんね」

「やだなあ、何も変なことしてませんよ？」

デカラビアは心当たりだけでも居ないと教えてくれた訳だし、怪魚は始末に困ったから渡したただけだ。

こんなことで何でそこまで言われるのか訳が解らない。

三人ともなんでそこで微妙な顔をするんだい？

悪魔が召喚者でもない相手に自分から情報を明かすということがどれ程の異常事態か、彼は気付いていないだろう。

彼は自覚の無いうちに悪魔から聞きたいことだけを聞き。そのことに『報酬』すら渡したのだ。

真偽の程はさして問題でも無かったのだろう、このやり取りこそが重要なのだ。

この身は既に風前の灯、魔力を回復する為にはあんな怪魚でも取り込まねばならない。

敵に必要なものを渡されてしまった。情けをかけられた気分だ。これを敗北と言わずとしてなんと言うのか。

否、既に一度負けている相手にたった今、改めて止めを刺されたのだ。

彼は既に私のことを敵とすら見ていなかったとも思える。

デカラビアは己が水の中に居たことを僥倖とさえ思っていた。

流した涙に気付かなかったからだ。
（認めよう、私の完敗だ…… 人間）

なかったことに（後書き）

ちょっと設定がわかりにくいかもしれません。
そのうち纏めて乗っけておこうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5462r/>

荒れ屋敷の今日も騒がしい住人達

2011年10月26日16時09分発行